

日本山岳会 ヒマラヤキャンプ登山隊 2024

The Japanese Alpine Club Himalaya Camp 2024

公益社団法人 日本山岳会 創立120周年記念事業

報告書



目次

<u>はじめに</u>	<u>P. 01</u>
<u>隊員名簿</u>	<u>P. 03</u>
<u>登山概要</u>	<u>P. 04</u>
<u>行動日程</u>	<u>P. 06</u>
<u>食糧報告</u>	<u>P. 07</u>
<u>装備報告</u>	<u>P. 10</u>
<u>会計報告</u>	<u>P. 11</u>
<u>保険報告</u>	<u>P. 12</u>
<u>医療報告</u>	<u>P. 13</u>
<u>通信報告</u>	<u>P. 15</u>
<u>渉外報告</u>	<u>P. 15</u>
<u>支援報告</u>	<u>P. 16</u>
<u>輸送報告</u>	<u>P. 17</u>
<u>記録・山行報告</u>	<u>P. 19</u>
<u>メンバーの感想</u>	<u>P. 25</u>

はじめに

20歳という若さでヒマラヤの未踏峰の世界を体験できたのは、先輩たちのサポートがあったからこそのことだった。信州大学山岳会隊の一員として参加した未踏峰ラトナチュリ(7035m)登山隊。当時の私は登山経験が浅く、実力も未熟だった。それでも私を受け入れ、支えてくれた先輩たちのおかげで、この挑戦はかけがえのない体験となった。しかし今の若い世代には、そんな機会が減ってしまっている。時代とともに社会人山岳会や大学山岳部などの組織は弱体化し、先輩から後輩へ技術や経験を受け継ぐ場が失われつつある。私はその現状に危機感を抱き、2015年にヒマラヤキャンプを立ち上げた。「次の世代にヒマラヤ登山の場を提供し、彼らの可能性を広げたい」という想いがこのプロジェクトの原点である。ヒマラヤキャンプの目的は、ただ未踏峰の初登頂を目指すことだけではない。私がプロジェクトを通じて実現したいことは三つある。一つ目は、ヒマラヤの未踏峰に登山する機会を若者たちに提供すること。二つ目は、海外登山を志す若手が集まり、仲間と共に経験を積む場を作ること。そして三つ目は、経済的な負担を軽減し、挑戦を支援する体制を整えることだ。私自身、若い頃は先輩たちを中心に多くのサポートを受けた。その恩を返すという意味でも、できる限り次世代の登山者たちを支えたいと思う。

ヒマラヤキャンプ2024の舞台は、ネパール西部のドルポ地方に位置するカンジロバ山群に決まった。ヒマラヤキャンプでは、毎回メンバー全員で目標となる山を探す。情報が少ない未踏峰をインターネットや文献で調べ、自分たちだけの登山リストを作るのだ。そして2024年の目標として選ばれたのが「サンクチュアリピーク(6207m)」だった。今回も数ある候補の中から選ばれたとおきの山だ。チームリーダーの松本歩美はじめ、メンバーの畠山愛以、長谷川陽央、平塚雄大の4名にとっては、初めてのネパールヒマラヤとなった。

カンジロバ山群は、1970年代前半に日本隊が主だったピークの初登頂に成功している日本人にとっても馴染みの深い山域である。しかしアプローチの困難さ故に、1950年代から続いた初期の探検家たちの努力によって、地形がほぼ解明され地形図が公表されたのは1967年になってからであり、それ以前はこのあたりの最高峰は7000mを超えているとされている時代もあった。特にカンジロバ山群の盟主であるカンジロバ主峰(6883m)が位置する場所は、四方を深い谷に囲まれた厳しい地形となっており、地形図が公表された後も、容易に人の立ち入りを許さなかったまさに「聖域」だった。この聖域に入り初めて登山を成功させたのが、1970年秋の大阪市立大学隊である。山域の西面から6000m近い山稜を越えてアプローチし、見事カンジロバ主峰の初登頂に成功した。またこの山群の記録を調べていくと、主だったピークの初登頂やその後の登頂は1960年代から80年代に集中しており、90年代以降は、登山記録はわずかに散見されるのみとなっている。

しかし2000年代になって、このエリアに再び注目した登山家がいた。それがフランス人登山家のPaulo Grobel氏だ。ネパールヒマラヤの辺境に詳しいPaulo氏とは2019年にヒムルンヒマールベースで会い、その後も彼が発信する様々な情報を参考にさせてもらっていた。そして2012年に彼がAmerican Alpine Journal(AAJ)に寄稿した登山記録に、サンクチュアリピークに関する記述があった。しかしこのときPaulo氏一行が登頂して命名したサンクチュアリピーク(6025m)と今回我々が登ったピークは、全く違うピークであると推察された。文中にも「And little Peak 6,207m is still unclimbed.」と記述されていることから、このピークこそが、ネパール政府の許可峰リストにあるサンクチュアリピーク(6207m)であると判断し、今回の挑戦につながった。

最後になりましたが、この登山隊にご支援をいただいた皆さまに深く感謝申し上げます。情報が少なく、地形が険しいエリアへの挑戦は、未知なる冒険そのものだと思います。どのルートが登頂可能か、どの地点でキャンプを設営するか、全てを現地で判断しなければなりません。未踏峰に挑むということは、地図にも描かれていない「空白」を切り拓く作業だと思います。この登山での経験は、参加したメンバー4人にとってかけがえのない時間であったに違いありません。この登山は、多くの方々からの多大なるご支援があったからこそ実現できました。心より御礼申し上げますとともに、2025年の活動にも変わらぬご支援とご声援をいただければ幸いです。

日本山岳会創立120周年記念事業
ヒマラヤキャンプ プロジェクトリーダー
花谷 泰広

【隊員名簿】



花谷 泰広 (はなたに やすひろ)
会員番号:13552
役割:プロジェクトリーダー



松本 歩美 (まつもと あゆみ)
会員番号:17213
役割:リーダー・渉外・支援



長谷川 陽央 (はせがわ よお)
会員番号:A0575
役割:装備・医療・保険



畠山 愛以 (はたけやま あい)
会員番号:A0574
役割:会計・通信



平塚 雄大 (ひらつか ゆうだい)
会員番号:A0589
役割:食糧・記録

留守本部

金子 貴裕	会員番号:17081 (ヒマラヤキャンプ2023年隊)
寺田 紗規	会員番号:17055 (ヒマラヤキャンプ2023年隊)
竹中 雅幸	会員番号:15458 (ヒマラヤキャンプ2025年隊)
田中 明良	会員番号:116616 (ヒマラヤキャンプ2025年隊)

現地エージェント

Kangri Trek(P)Ltd.
Naxal, Bhagwati, Bahal, KumariMarg, Kathmandu, Nepal
TEL:00977-1-4414633,4414644 E-mail:kahangritrek@mos.com.np
代表:Pasang K Sherp

【登山概要】

担当: 平塚 雄大

山の名称: サンクチュアリーピーク 標高: 6,207m

山域 : 西ネパール ドルポ

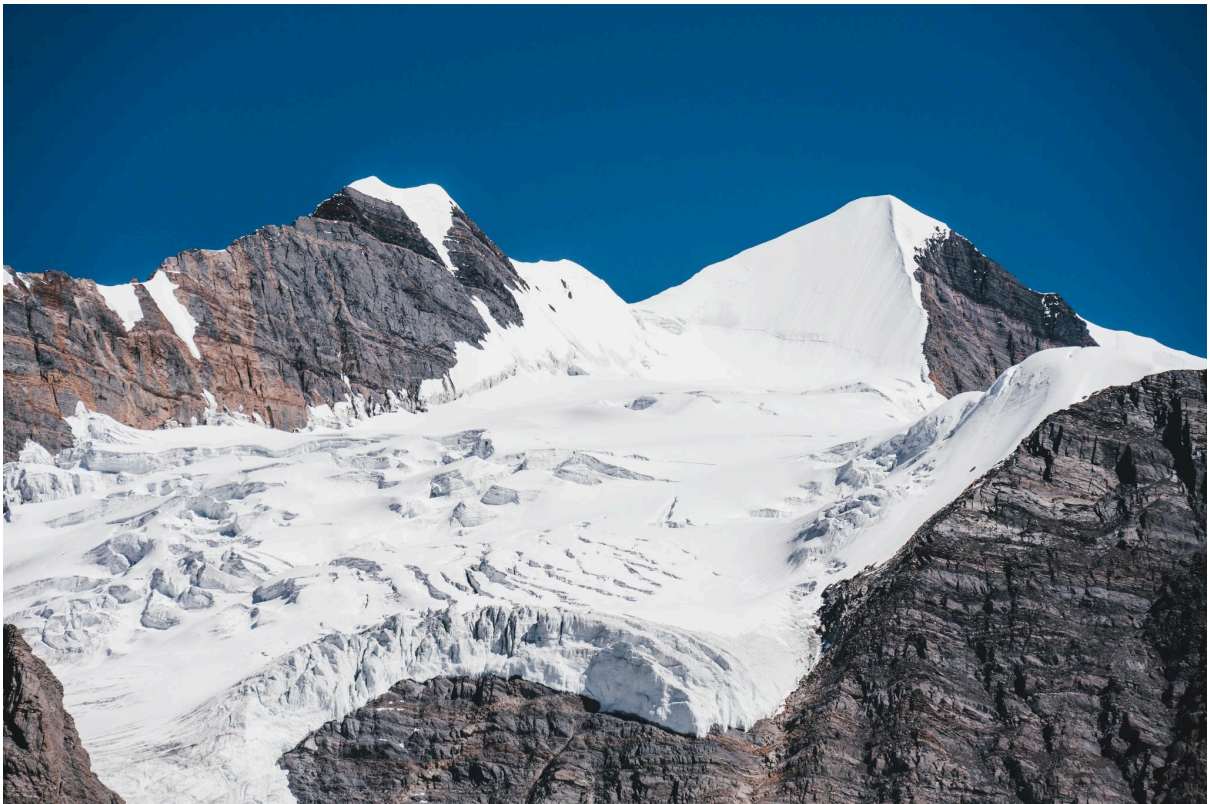
日程 : 2024年9月25日～11月13日 (50日間)

概要

サンクチュアリーピークは、西ネパール・シェイボクスンド国立公園・カンジロバ峰の北東にある未踏峰であり、ジャガドゥラ川の源頭部に位置している。

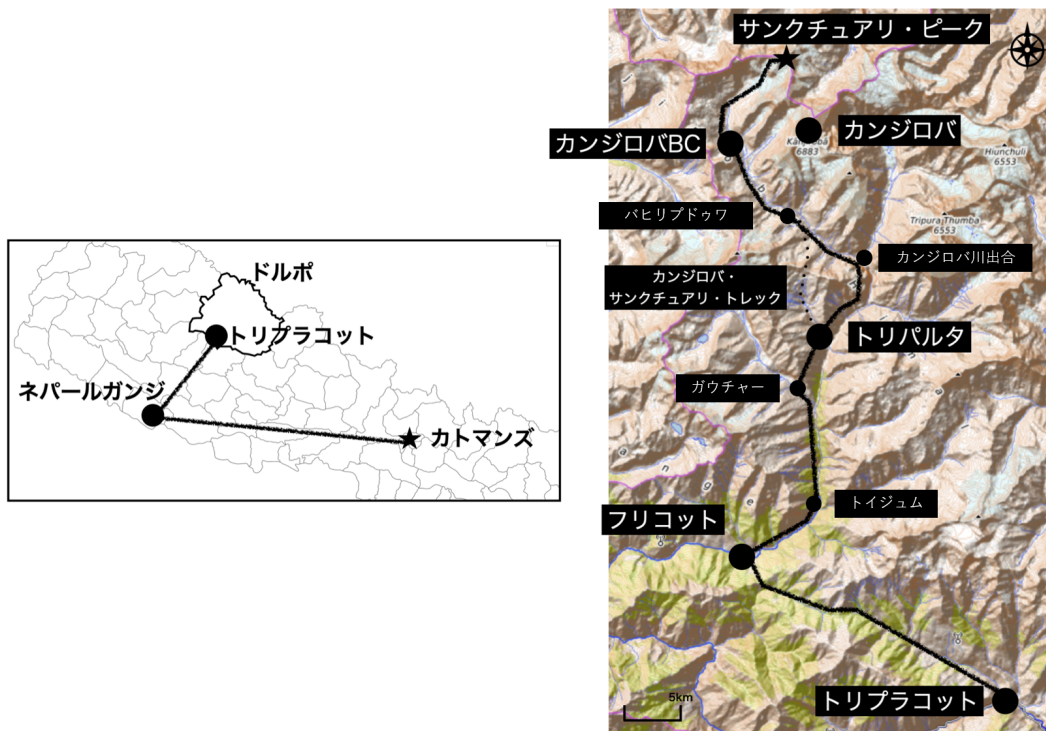
カトマンズからバスでトリプラコットまで、そこから最後の村フリコットまではジープとトレッキングで向かう。フリコットからBCは、約50キロの距離があり、6つのキャンプ地を経由した。

HCから上部へのアプローチは、東側と西側の氷河どちらかが候補であったが、偵察の結果西側の氷河からアプローチをし、標高6000mからは西尾根から頂上を目指した。

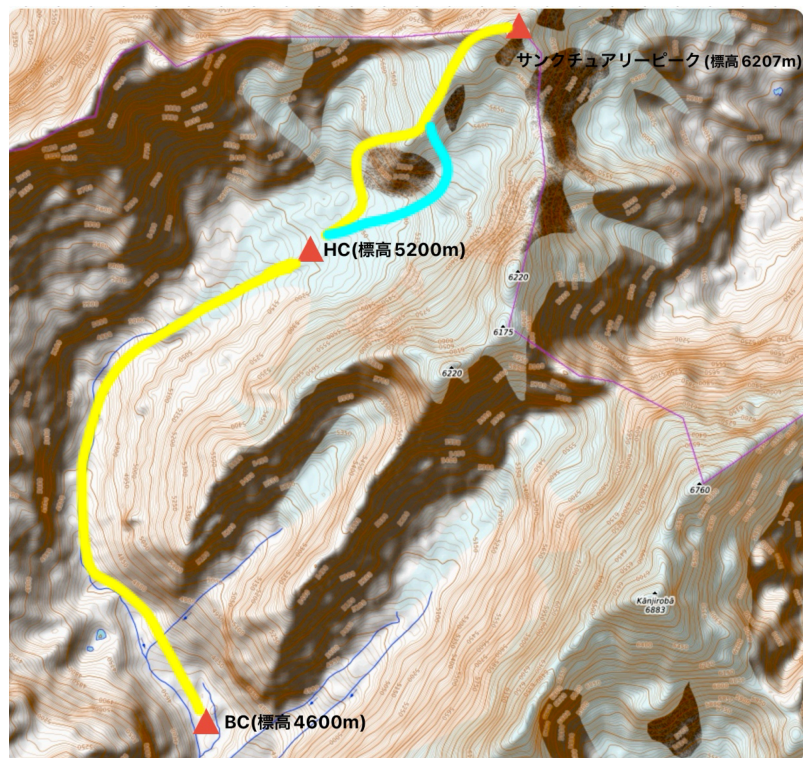


標高5,000m地点から見たサンクチュアリーピーク

キャラバン 概念図



登山 概念図



黄ルート: 実際に歩いたルート

水色ルート: 候補に挙がっていたルート

【行動日程】

担当:平塚 雄大

日数	行動	内容			
1	9/25	到着	東京→カトマンズ		
2	9/26	手続き	カトマンズ・ブリーフィング（観光省）・装備点検		
3	9/27	準備	カトマンズ・装備点検		花谷
4	9/28	準備	カトマンズ		東京→バンコク
5	9/29	準備	カトマンズ・装備点検・買い出し		バンコク→カトマンズ
6	9/30	準備	カトマンズ・ブジャ・ブリーフィング（エージェント）		
7	10/1	移動（バス）	カトマンズ→チンチュウ（夜通しバス移動）		
8	10/2	移動（バス）	カトマンズ→チンチュウ		
9	10/3	移動（バス）	チンチュウ→トリベニ		
10	10/4	移動（バス）	トリベニ→トリブラコット（標高2100m）		
11	10/5	移動（ジープ）、キャラバン	トリブラコット→フリコット（標高2700m）		
12	10/6	キャラバン	フリコット→トイジウム（標高3100m）		
13	10/7	キャラバン	トイジウム→ガウチャー（標高3900m）		
14	10/8	レスト	ガウチャー		
15	10/9	キャラバン	ガウチャー→トリバルタ（標高3900m）		
16	10/10	キャラバン	トリバルタ→リンザ（標高3800m）		
17	10/11	キャラバン	リンザ→カンジロバ川出合（標高3800m）		
18	10/12	キャラバン	カンジロバ川出合→バヒリブドゥワ（標高4100m）		
19	10/13	キャラバン	バヒリブドゥワ→カンジロバBC（標高4600m）		
20	10/14	レスト	カンジロバBC		
21	10/15	偵察・順応	カンジロバBC→標高5100m地点→カンジロバBC		
22	10/16	レスト	カンジロバBC		
23	10/17	荷揚げ	カンジロバBC・ブジャ→HC（標高5200m）		
24	10/18	偵察	HC→標高5500m地点→HC		
25	10/19	サミットブッシュ	HC→山頂→HC		
26	10/20	レスト	HC→カンジロバBC		
27	10/21	レスト	カンジロバBC		
28	10/22	レスト	カンジロバBC		
29	10/23	レスト	カンジロバBC		
30	10/24	レスト	カンジロバBC		
31	10/25	C1撤収、荷下げ	カンジロバBC→HC→カンジロバBC		
32	10/26	レスト	カンジロバBC		
33	10/27	レスト	カンジロバBC		
34	10/28	BC撤収、キャラバン	カンジロバBC→カンジロバ川出合		
35	10/29	キャラバン	カンジロバ川出合→リンザ		
36	10/30	キャラバン	リンザ→ガウチャー		
37	10/31	キャラバン	ガウチャー→フリコット		
38	11/1	移動（ジープ）	フリコット→ジウムラ		
39	11/2	移動（バス）	ジウムラ→ババイ		
40	11/3	移動（バス）	ババイ→カトマンズ		
41	11/4	片付け	カトマンズ・ブリーフィング（エージェント）・装備片付け		
42	11/5	片付け	カトマンズ・装備片付け		
43	11/6	片付け	カトマンズ・ブリーフィング（観光省）・装備片付け		
44	11/7	片付け	カトマンズ・日本大使館訪問・事務手続き（エージェント）・装備片付け		
45	11/8	自由行動	カトマンズ		
46	11/9	自由行動	カトマンズ		花谷
47	11/10	自由行動	カトマンズ		カトマンズ→バンコク
48	11/11	自由行動	カトマンズ		バンコク→成田
49	11/12	フライト	カトマンズ→東京		
50	11/13	フライト	カトマンズ→東京		

【食糧報告】

担当:平塚 雄大

2024隊も、ヒマラヤキャンプが毎回お世話になっているダワさん(サーダー)にお願いした。今回の遠征はキャラバン中に村がなく食事を提供していただかなければならなかったのも、他にキッチンボーイとして、チリンとダワの2名、計3名のスタッフが、遠征中、共に行動し、毎日食事を提供してくれた。

日本からの持ち込み

今回は、前年度の隊からBCの食事は提供される以外に用意する必要はないと申し送りを受けていたので、日本からはBC以降の食事を中心にネパールへ持ち込んだ。行動食についても、キャラバン中に食べるものは現地で調達し、BC以降のみ食べ慣れたものを持参した。



写真左: 真空パックでカップ麺を梱包する



写真右: 日本から持ち込んだ行動食・尾西

行動食、飲料、調味料、買い出し

ネパールの大型スーパーでは、エナジーバーやスナック、チョコレートやクッキーなどの甘いもの、ポテトチップス等々、行動食は全て揃えることができる。グミの種類は少なかったがハリボは売っていた。今回はエナジーバーなども日本から持ち込んだが、もっと現地のスーパーを活用すれば輸送料金の超過を抑えられると感じた。日本から持ち込んだ行動食で最も消費が早かったのはマヌカハニーや龍角散のど飴で、キャラバン中は常に舐めながら行動していた。行動食は甘いものが多かったのも、尾西の携帯おにぎりはキャラバン中、高所どちらでも美味しくて重宝した。

飲み物は全て個装のスティックタイプにして種類を増やした。高度順応中は水分を多く取らなくてはいけなかったので、飽きずに飲める工夫ができたのは良かった。BCでは、毎日大きなポットで美味しいミルクティーが出る。紅茶パックや粉ミルク、砂糖もあった。またミロやスキムミルクなど栄養があるものを持っていったが、普段飲まないものだったのでほとんど飲まずに余ってし



写真: 大体のものが揃う大型スーパー

まった。持っていくものは普段から飲んでいるもので良いと思う。ポカリやアクエリアスの粉についてもかなり余ったので、多量に持っていく必要はないと感じた。

調味料についても、醤油やマヨネーズ、七味、ケチャップや粉ミルク等の日本で使用するような調味料の多くはカトマンズのスーパーで購入することができる。わさびやブルドックソース、ごま油、だし醤油は売っていないと聞いていたので持参した。中華ペーストも持参したが使用する機会がなかった。上記の調味料とふりかけは、BCでの食事での味変に役立った。

キャラバンとBCの食事

キャラバンとBCの食事はとても豪華で、例をあげると、ピザやコロッケ、ハンバーガーにローストチキン、チキンカツ丼等々、ここに書き出したらキリがないほどバリエーション豊富な食事を提供していただいた。特にダワさんが作るダルバートは絶品で、これを書いている今も思い出して涎が出てしまうほどの美味しさであった。



キャラバン・BCの食事例：左からカツ丼、コロッケ、ローストチキン

登山中の食事

今回はバックキャラバンの日程が前倒しになり、食糧に余裕があったのでハイキャンプの食事については、隊の食糧の中から各々食べたいものを持っていく方法を取った。食事内容は、アルファ米とフリーズドライのおかずとスープ若しくは、カップ麺とフリーズドライのおかずといった組み合わせにした。標高5200mのハイキャンプではメンバー全員に食欲の減退が見られ、頑張って食事を流し込んだ。ある隊員はカップラーメン等の味の濃いものが受け付けず、規定量よりも味を薄くして食べていた。



写真左：アミノバイタルのアミノショットを食べる

写真右：尾西の携帯おにぎりを食べる

輸送

輸送にも絡むことだが、バックキャラバンの最終日にポーターに搬送してもらっているバック内でめんつゆが全て溢れてしまったので、開封済みの調味料の容器は面倒でも、テープなどで留めておいたほうが良い。

【装備報告】

担当: 長谷川 陽央

キャラバン

BCまでは危険箇所が複数あり、ポーターの安全確保のためフィックスロープを張った。
道に詳しいポーターが、道中でロープが必要と判断した日は、以下をすぐ出せるように自分達が持った。

- ・フィックスロープ6mm*60m
- ・フィックスロープ7mm*60m*2
- ・ダイニーマスリング120cm 4
- ・環付きカラビナ4

サミットプッシュ

サミットプッシュでは、2人、または3人1組でコンテ、スタカットで進む想定で装備を持っていった。偵察によって岩のパートはないことが確認できたため、ピトンやカムといった岩用のギアは持っていかなかった。

サミットプッシュに持って行ったギアは、主に以下である。

[共同装備]

- ・ロープ2本
- ・スノーバー5本
- ・スクリュウ4*2本
- ・アルパインヌンチャク5*2
- ・アッセンダー2
- ・竹竿40本

[個人装備]

- ・PAS
- ・ビレイ器(HMSとセット)
- ・ダイニーマスリング120cm*2
- ・環付きカラビナ*2
- ・カラビナ*2
- ・キャリービナ*2
- ・アックスまたはピッケル*2
- ・アイゼン(モノポイント,デュアルポイント,平爪を各人が選択)
- ・リーシュ
- ・スクリュウ19cm*1
- ・タイブロック(HMSとセット)
- ・マイクロトラクション(HMSとセット)

【会計報告】

担当: 畠山 愛以

収入

- ・隊員個人負担金 (30万円×5名): 1,500,000円
- ・日本山岳会 23年度予算金: 1,000,000円
- ・日本山岳会 会員内寄附: 640,000円(2024年8月30日時点)
- ・会員外個人寄附金: 2,000,000円
- ・企業支援金: 2,000,000円
- ・23年度 繰越金: 1,277,567円

収入合計: 8,417,567円 (2024年11月24日時点)

支出

◆国内支出

- ・国内準備購入費 (装備・食糧・医療・その他): 229,551円
- ・通信費 (インリーチ通信料2機分): 49,194円
- ・航空券費 (5人分/1人平均196,530円): 982,650円
- ・ネパールVISA費(5人分/1人平均15,802円): 79,010円
- ・保険費 (関西エアポートリテール4人分/振込手数料込み): 327,880円

国内支出合計: 1,667,885円(2024年11月24日時点)

◆国外支出※1ネパールルピー(Rs)=1.14円

- ・エージェンツ費: 5,451,000円 (日本円にて支払い)
(カトマンズ宿泊費・車移動費・登山ロイヤリティ・国立公園パーミット・BC食糧費・ネパール人スタッフ日当・ポーター代・ゾッキヨ/ゾッキヨドライバー代・装備レンタル・ネパール人スタッフ用保険・手数料等)
- ・装備費: 4,400円 (Rs. 3,860)
- ・食料費: 58,452円 (Rs. 51,274)
- ・交通費: 5,255円 (Rs. 4,610)
- ・宿泊費: 73,131円 (Rs. 64,150)
- ・食費: 156,006円 (Rs. 136,847)
- ・人件費: 147,060円 (Rs. 129,000)
- ・その他: 27,092円 (Rs. 23,765)

国外支出合計: 5,922,397円

支出合計: 7,590,282円

【保険報告】

担当: 長谷川 陽央

本遠征では、花谷さん以外は関西エアポートリテールサービス社が提供している山岳保険に加入した。(花谷さんは労山に加入しており、その保険を使用した。)

同社の保険を選んだ最大の決め手は、日山協の保険と比べて割安であったことである。

ただし、同社は通常、未踏峰登山の保険を引き受けていない。この度は、ヒマラヤキャンプという実績のあるプロジェクトであること、これまで事故を起こしていなかったことを説明し、特別にお願いいただいた。

プランは以下の通りである。

(千円単位)

傷害死亡後遺障害: 10,000(長谷川のみ30,000)

疾病死亡: 20,000

賠償責任: 100,000

携行品: 500

治療・救援費用: 無制限

航空機寄託手荷物: 100

航空機遅延: 20

本遠征では、隊員のカメラが一部破損したため、携行品の補償を申請し、受理された。

なお、歯科疾病に関しては保険対象外であるため、注意が必要である。本遠征中、食事中に歯茎にマトンの骨が刺さって取れなくなった隊員がいた。その際保険適用になるか確認したところ、診断書で歯科疾病と書かれるか、傷害と書かれるかが争点であり、歯茎に骨が刺さったという事象は傷害に当たる可能性があるとのことであった。結局歯医者の方の好意で無料で処置していただけたが、歯医者にかかる場合でも保険の対象となる場合があるということは、後学のために知れて良かった。

【医療報告】

担当:長谷川 陽央

昨年に引き続き、榊原先生から医薬品をご提供いただいた。いただいた医薬品のリストを以下に示す。

	用途	処方	数
内服薬	解熱・鎮痛剤	ロキソプロフェン	50
	総合感冒薬	PL顆粒	50
	胃腸薬	レパミヒド	40
	制吐剤	メクロプラミド	20
	整腸剤	ミヤBM	30
	止痢剤	ロペラミド	30
	抗菌剤	フラジール	20
	抗菌剤	レボフラキサシン	10
	抗アレルギー剤	フェキソフェナジン	30
	高山病 (高度肺水腫 HAPE)	ダイアモックス	30
		ニフェジピンCR	10
	乗り物酔い	トラベルミン	50
	下痢	センノシド	20
外用薬	解熱・鎮痛剤	ジクロフェナク坐剤	10
	抗生剤入り軟膏	ゲンタシン軟膏	1
	ステロイド軟膏	リンデロンクリーム	2
	鎮痛剤	ロキソニンテープ	21

隊員が使用した医薬品は、主に以下である。

- ・PL顆粒
- ・ゲンタシン軟膏
- ・抗菌剤(内服薬)

PL顆粒は、各種風邪症状が出た時に服用した。ゲンタシン軟膏と抗菌剤(内服薬)は、隊員が切り傷を負った際に、感染予防として服用した。

本遠征は、バス移動が約800kmと長かったため、乗り物酔い止めを多くいただき、各人に配布した。

その他、ポーターやガイドが体調不良を訴えることもあり、適宜以下を与えた。

- ・風邪薬
- ・フェキソフェナジン
- ・頭痛薬

ポーターに薬を与える際は慎重に考えた。理由は、①普段彼らが使用していない薬であること、②アレルギーの有無がわからないこと、③自分たちの分が少なくなること、である。

そのため、日本で市販されている薬と同じ成分の薬であること、薬はキャラバン後半になって渡して自分たちの必要分は確保すること、決められた容量・用法を伝えること(キッチンボーイに通訳してもらった)を条件に、ポーターに薬を与えた。

榊原先生からいただいた薬のほかにも、隊員個人でも常備薬を持参していた。よく使用していたのは以下である。

- ・葛根湯、ギンギョウサン、補中益気湯などの漢方
- ・風邪薬
- ・整腸剤
- ・のど飴

漢方や風邪薬は予防のために飲まれることも多かった。漢方は、薬剤より気軽に飲めるという点が良いようだ。整腸剤は、ネパールの食事に慣れるまでは毎食飲まれていた。ビオフェルミンやミヤリサンといったものが飲まれていた。

ヒマラヤでは、乾燥が激しく砂煙も多いため、喉を痛める隊員が多かった。また、高所では咳が続く隊員が多かったため、咳止めがあった方がよかった。ある隊員は、咳のしすぎで喉や肋骨を痛めていた。

【通信報告】

担当：畠山愛以

無線機・衛星電話

BC以降の基本的な通信は、無線機にて実施した。ダワさんに1台をBCにて常に携帯してもらい、登山中の連絡はダワさんに対して行った。衛星電話に関しては、上部キャンプには上げずダワさんに預けていた。緊急時は、無線でダワさんに連絡をとり衛星電話で対応をお願いする形をとった。また、無線が繋がりにくい可能性も考慮してインリーチのSOS機能はメンバー間で共有した。基本的には無線が通じていた為、連絡における大きなトラブルは無かった。

インリーチ

留守宅本部や国内メンバーとのやりとりはインリーチで行った。また、天気予報もインリーチに情報を送って頂きそれを参考に登山計画を調整した。多少、タイムラグがあるものの日々最新の情報を得ることができた為、大変役に立った。

【渉外報告】

担当：松本 歩美

2024年1月より、9月～11月の遠征に向けて現地エージェント、カングリトレックの窓口であるナビン氏とやり取りを重ね計画を進めてきた。

今回目的としていたサンクチュアリピーク(6,207m)は西ネパールのドルポエリアという地域に存在する。このエリアには特別に入山にかかる費用なども存在するためそれらの調査や見積も依頼した。ベースキャンプへのルート情報、移動手段、アプローチ方法について具体化させるため、現地の情報収集を行った。今回はキャラバン開始の地点付近への移動について、飛行機での移動も可能であったがフライトの不確実性があったためバス移動を決定した。キャラバン中の荷物の運搬についてはジョキョ(ラマ)などの動物を使うことができないことが明らかになり、ポーターの手配を依頼した。

事前の入山許可に関する手続きなど、カングリトレックを通して実施した。

エージェント	Kangri Trek(P)Ltd. Naxal, Bhagwati, Bahal, KumariMarg, Kathmandu, Nepal TEL:00977-1-4414633,4414644 E-mail:kahangritrek@mos.com.np
代表	Pasang K Sherpa
窓口	Nabin Adhikari

【支援報告】

担当: 松本 歩美

ヒマラヤキャンプ2024では、以下のスポンサー様にご支援頂きました。

以下順不同

スポンサー

株式会社ゴールドウィン (ノースフェイス) 様
株式会社ファイントラック (finetrack) 様
日本用品株式会社 (スポルティバジャパン・GM) 様
株式会社インパクトトレーディング 様

サポート

株式会社アライテント 様
株式会社マジックマウンテン 様
株式会社ナンガ 様
尾西食品株式会社 様
味の素株式会社 様
ルックスオティカジャパン株式会社 様

医薬品提供

榊原 嘉彦 先生

天気予報提供

株式会社ヤマテン 猪熊 隆之 様

加えて、多数の個人のご支援も賜りました。
皆さまのお力添えのもと、今回のチャレンジを行えたと実感しております。
重ねてお礼申し上げます。

【輸送報告】

担当:平塚 雄大

日本からカトマンズ

装備、食料等のネパールへの持ち込みは、事前の国際輸送は行わず、全てメンバーの航空便の預け荷物、手荷物で行った。

今回は、花谷を除くメンバーは昨年と同様にカトマンズまでの直行便が出ているネパール航空を、花谷はバンコクを経由するタイ国際航空を利用した。ネパール航空の出発地は成田、タイ国際航空の出発地は羽田であった。航空券は、『BOOKING.COM』や『TRIP.COM』にて、フレキシブルの航空券を17万円から20万円程で取得した。

ネパール航空は、預け荷物が合計で35キロ迄(一つ最大32キロまで、計2個まで)、タイ国際航空は、預け荷物が32キロ迄が無料の範囲である。どちらの航空会社も機内持ち込み手荷物は7キロ迄であった。

国内で、食糧の振り分けを行ったが、持ち込む食糧が多く、その他にも6人用テントやクライミングギアの持ち込みもあったので、30キロ程度オーバーチャージしてしまった。空港までの荷物の搬送について、食糧は特に量が多く1人で空港まで搬送することは困難であるので、早めに梱包しメンバーに振り分けておいたほうが良い。

空港内では、松本、長谷川、畠山には、34キロ程度になるように荷物を振り分け、残りの荷物を全て平塚の預け荷物とした。この方法で荷物を預けたときに、オーバーチャージ料金を少し割引してもらえたのでおすすめだ。その際に、余分に持ってきていたダッフルバッグに荷物を全て詰め込んだので、ダッフルバッグは1-2個余分にあったほうが良い。また、このような荷物の振り分けに時間を要するため、出発の3時間前には全員が集合していたほうが良いと思う。

メンバー4名は、預け荷物の軽量化のため空港でG2等の冬靴に履き替え、手荷物については3-5キロ程度許容量を越える量を持ち込んだが、あまりおすすめできる方法ではない。

食糧は報告の通り、減らす余地があるが、やはりG2等の冬靴やギア、衣類などを持って行くには、35キロに荷物を収めることはかなり厳しい。予めオーバーチャージの予算を取っておく必要がある。



写真左: 荷物を搬送する様子



写真右: カングリトレックで梱包を終えた荷物

カトマンズからBC

カトマンズのエージェント(カングリトレック)の倉庫にデポされている、ヒマラヤキャンプ共同装備や花谷の個装などを全て広げ、使用可能かのチェックを行い、日本から持ち込んだ装備と合わせて、BCまで開けない物、キャラバン中に使う物、メンバーがキャラバン中に使用するものを分けて、番号を振り、記録をし、ダッフルバックや樽にパッキングをし直した。

9月下旬のカトマンズはまだ雨季が終わっておらず、毎日雨が降ったり止んだりの天気であった。幸いにも準備初日は半日ほど晴れが続いたので、テントや寝袋を干すことができた。その他の装備は、倉庫内の狭いスペースで作業を行った。

1度目のパッキングを終えた後、カトマンズでは災害級の大雨が降り、カングリトレックのオフィスが浸水した。ビニール袋でバッグ内の濡れ対策をしていなかったため、荷物の大半が濡れてしまった。そのため全ての装備を天日干しし、再度パッキングを行った。

ダッフルバックや樽は、トリプラコットからフリコットはラバが搬送し、そこからBCまではポーターが搬送した。ポーターが搬送できるように最も重いものでも25キロ以下になるようにパッキングを行った。2日目のキャンプ地であるガウチャーにてポーターから荷物が重いと苦情を受け荷物の選別を行ったが、無線の説明書や太陽光パネル等の必要なものも置いてしまったので、荷物をもし選別する機会があれば慎重に行ったほうが良い。また、道中でBCまで開けない物が入ったダッフルを荷解きして使用することは手間がかかるので、必要か悩むものはキャラバン装備に入れた方が良い。



写真左:ラバに荷物を取り付ける様子



写真右:荷物を搬送するポーター

【記録報告・山行報告】

担当: 平塚 雄大

9月25日～9月30日 入国～カトマンズ準備

ネパールにあるヒマラヤキャンプ装備と持参した装備を合わせキャラバンの準備をした。観光省にてブリーフィングを実施。28日から29日にかけてカトマンズでは記録的豪雨が降り、カンブリトレックのオフィスが浸水し、寝袋などが濡れてしまったため、殆ど全ての共同装備を天日干しし、再度パッキングを行った。今回の遠征では、キャラバン中も食事を用意してもらう必要があるため、サーダーのダワさん、キッチンボーイのチリンとダワ計3名が同行することとなる。

10月1日～10月4日 バス移動

大型バスで4日間の移動を行う。1～2日目は、豪雨の影響で大渋滞が発生したため、出発後カトマンズを出るのに4時間以上を要した。バスは夜通し走行を続け、出発から約28時間でチンチュウという街に到着し、ここで1泊した。3日目はトリパニに1泊し、4日目の朝にトリプラコット(標高2100m)という村に到着した。午後はレストとし、各々翌日からのキャラバンの準備をした。

10月5日～7日 ジープ、キャラバン

1日目はフリコット(標高2700m)という村を目指した。トリプラコットからフリコットに向かう峠が雨の影響で走行することができないため、途中までジープで走行し、そこからはトレッキングで村に向かった。峠からの下り途中で夜になり、ルートファインディングに苦心したが、ルート上で出会った村人の案内で事なきを得た。

2日目はトイジュム(標高3100m)へ進む。昨日はラバで荷物を運んでいたが、ここからはポーターが荷物を搬送する。ポーターたちの荷物の振り分けなどに時間がかかり、午後からのスタートとなった。ここから先は村がないため、この日からキャンプとなる。

3日目はガウチャー(標高3900m)を目指す。この日までは基本的に歩き易い登山道が続いていた。キャンプ地到着後はそれぞれ標高差100～200mほどの順応運動を行なった。その日の夜には、ポーターたちと今後の予定について話し合いが行われた。当初予定していた5300m程度の峠を越えていく、カンジロバ・サンクチュアリトレックというルートは危険という事で、もうひとつのルートが提示されたが、ポーターたちは地図が読めないのどこを進むのかが我々は理解できなかった。1時間程度の話し合いの末、ポーターたちの意見が採用された。次のキャンプ地はトリパルタという場所で、標高は3900m程度のような。次の日から先へ進みたかったが、当初の予定では4日目は順応トレッキングのためレストの予定であったので、やむを得ずレストとすることになった。

日程	当初の計画	変更後の計画
10月8日	ガウチャー→標高5300のコルへ高度順応&偵察	レスト
10月9日	レスト	ガウチャー→トリパルタ
10月10日	ガウチャー→標高5300のコル→標高4200のキャンプ地	トリパルタ→リンザ
10月11日	標高4200のキャンプ地→BC	リンザ→カンジロバ川出合
10月12日		カンジロバコーラ→バヒリブドゥワ
10月13日		バヒリブドゥワ→BC

表1 当初の計画と変更後の計画

10月8日 レスト

午前中は順応を兼ねて、4200mの丘へ散歩へ出かけた。この散歩にはポーター2人も付いてきて、一緒にfrisbeeなどをした。ポーターとの距離が少し縮まったように感じる

ひとときだった。午後は、ポーターたちから荷物が重すぎるという意見があり、不要な荷物の選別を行なった。ダイニングテントや予備のテント、食材やガスなどをデポした。なお、食材やガスなどはBC到着後、数人のポーターが再度搬送を行なった。

10月9～13日 キャラバン

5日目はトリパルタ(標高3900m)へ向かう。ここからは、我々が全く把握していない道なのでポーターたちに道案内をしてもらいながら進んだ。道はジャガドゥラコーラという川の右岸を終始トラバースしていくものであった。獣道程度の踏み跡しかなく、我々だけでは到底分からないものであった。トリパルタコーラという川とジャガドゥラコーラの出合いにある森林内がこの日のキャンプ地となった。どうやらこの周辺にはダニがいたようでこの日から数日間数人が発疹と痒みを訴えていた。

6日目はリンザ(標高3800m)を目指す。前日と同様に右岸をトラバースしていった。この日はロープが必要な箇所が数箇所あるということで、サーダーのダワと畠山が先行してFIXロープの設置を行なった。ここに長谷川が合流し、ポーター通過後FIXロープの回収を行なった。2、3箇所目は、ダワと松本、平塚が設置した。設置箇所は、主に急な下りと岩のトラバースだ。ポーターたちにも技量に差があり、技量のあるポーターは他のポーターの荷物を持ちFIXロープの箇所を何往復もしていた。リンザは直近に水場がないため、手前の水場でメンバー全員の容器に水を汲んで向かった。

7日目はカンジロバ川出合(標高3800m)へ向かう。まず100m程斜面を降っていった。そこには、高低差50-100m程のゴルジュ上にダケカンバが数本束ねられただけの簡易的な橋がかかっていた。そして、そのすぐ先にはここもダケカンバが数本かけられているだけのハシゴがあり、そこでの荷揚げの為にロープを設置し対応した。ここから先は、左岸を進んでいく。ロープを使う場所はないが、藪漕ぎのような道や、ガレ場のトラバースなど気を遣って歩かなければならない場所が数箇所あった。カンジロバコーラの出合いに到着し、渡渉した先がこの日のキャンプ地となった。ガウチャーで聞いたポーターの話だと、明日到着予定であったが、ここから1日では行くことができないということで、BCまであと2日かけて行くことになった。



8日目はバヒリブドウワ(標高4100m)へ向かう。この日はまず150m程の登りから始まり、その後は川沿いまで降った。その後は、50m程のゴルジュを高巻きして行った。ガレた場所の通過もあり緊張感のある道であった。この日に限らず、このキャラバンのルートは獣道のような踏み跡がなく、ポーターと離れて歩いた際は少し道が分からなくなるような場面があった。キャンプ地は川沿いで、深い谷の中にいるため16時前には日が陰り気温以上に寒く感じた。

9日目は、カンジロバBC(標高4600m)を目指す。ここからは、今回のキャラバンで初めての標高帯に突入するため、各々のペースで歩き、余裕があるメンバーは先頭付近で歩きBCの偵察へ向かった。前半と後半にそれぞれ渡渉した。ルート上からは、カンジロバなどの6000m峰がいくつも見えた。13時頃にカンジロバBCに到着した。ここは、地元の人たちからはエアポート平原と呼ばれており、ここまでの丘陵な地形からは信じられないほどの平原が広がっていた。ここでポーターたちに給料を支払い、ポーターたちは来た道に戻っていった。バックキャラバンの日程がネパールの休日であるティハールの影響で、11月4日開始から10月28日開始と大幅に前倒しとなった。

10月14日 レスト

10日振りのシャンプーや洗濯をしてゆっくりと過ごした。午後には、サミットプッシュの食料や装備を少し整理し、明日からの偵察に備えた。

10月15日～17日 ルート偵察・C1設営

15日はBCから先の偵察を行った。カトマンズを出発して15日目にして、とうとうサンクチュアリーピークの姿を見ることができた。モレーンにケルンとピンクテープを設置しながら標高5100m地点まで登り、C1のおおよその目処がついたため引き返した。16日は、平塚と畠山が疲労感と頭痛などで体調が優れないこともありレストとした。このときの天気予報では、19日の午後から数日間天気が崩れる予報であったので、19日にサミットプッシュをすることを視野にいれ、計画を立てた。17日はダワさんにプジャをしてもらい、その後各自のペースで荷揚げを行なった。標高5200m地点のモレーン上に水も入手することができる適地を見つけ、C1を設営した。





10月18日 上部偵察

花谷、畠山の2人と、松本、長谷川、平塚の3人でそれぞれロープを結び氷河帯の偵察を行なった。先行の2人がルートを探り、後の3人でルート上にピンクテープを設置していった。いくつかのルートを検討した結果、氷河の右端から取り付き、そこからクレバス帯を突破するルートを見出すことができた。5500地点まで登ってルートを確認し、その位置に登攀器具をデポした。昼過ぎにはC1に戻り、半日はレストをしてのんびり過ごした。メンバーは、それぞれ頭痛や嘔気などの多少の高度障害があったが、全員のペースもまずまずであったので、翌日にサミットプッシュを行うことを決定した。



10月19日 サミットプッシュ

前日は早めに夕食を済ませ17:30に就寝、1:30に起床した。長谷川が嘔吐をしたが、他のメンバーは多少の食欲の減退はあるものの、概ね体調は良かった。出発の準備をして、3:30に出発する。満月の翌日だったため月が明るく歩きやすい。昨日のルートを辿り、出発から2時間ほどで5500m地点に到達した。ここからは、花谷、畠山の2人と、松本、長谷川、平塚の3人のチームで交互に先頭を交代して標高を上げていった。ところどころ大きなクレバスが口を開けていたが、順調に標高を上げることができた。5800m付近で膝丈程度の斜面を登っている時は、かなりキツく感じた。標高6000mあたりで稜線に上がり、ここの雪稜はスタカットに切り替えて進むことにした。1ピッチ、2ピッチ目は、畠山がリードした。雪稜をトラバースしながらシュガースノーに微妙にしか効いていないスノーバーを使用する登攀は、メンバーにとっては初体験でかなりの時間を要した。このままでは登頂時間がかなり遅くなりそうな雰囲気になったため、ここからは花谷がリードし、FIXしたロープをメンバーが登ることとした。スタカットを始めて6ピッチ目、12時30分頃に6207mの山頂に到達した。雪底が発達していたため、ギリギリまで登って記念撮影をした。予報通り午後から雲が増え、天候が変わる兆しが見えた。慎重に來た道を下降し、16:30頃C1に下山した。ここから、平塚と長谷川はBCまで下山しようと試みたが、モ

レーンの途中で日が沈み、この先のケルンを見つけることができなくなってしまった。雪が舞う中、来た道をC1まで戻り事なきを得た。



10月20日～24日 レスト

20日は、全員疲労が溜まっていたこともあり、C1は後日撤収としBCまで戻ることとなった。BCでは、ダワさんたちが焼きたてのパンとジュースを用意して出迎えてくれた。21-23日はレストとした。24日にC1を撤収する予定であったが、23日の夜間に5-10cm程度の降雪があったため、25日に延期することとなった。

10月25日 C1撤収

9時頃に出発しC1の撤収に向かった。順調に撤収は終わり、帰りはモレーンのピンクテープを回収した。モレーンを抜ける地点でサンクチュアリーピークに最期の別れを告げた。

10月26日～27日 レスト

共同装備をまとめたり、BC撤収の準備をした。

10月28日～31日 BC撤収、バックキャラバン

行きはレストを含め9日間かかった道のりを、帰りは4日間で戻る。28日は、カンジロバコーラを目指す。当初の予定では、10時頃にBCを出発する予定であったが、ポーターの到着が遅れ、12時頃の出発となった。この日は、下りではあるが行きの2日分歩く予定であったので、我々が日没直前の到着、ポーターたちの多くはその1時間後の到着となった。29日はリンザへ向かう。ダケカンパの梯子の部分は、荷物をローワーダウンするためのロープを設置し対応した。この日は、トリパルタまでの予定であったが、14時頃にリンザへ到着し、ポーターと話し合った結果、この位置で宿泊することとなった。夜はポーターと焚き火を囲み話したり、踊ったりして親睦を深めた。30日はガウチャーを目指す。ダワ、松本、平塚、長谷川で先行し、行きと同様の岩のトラバースと、急な登りの部分にFIXロープを設置した。その後、スラブの下りで花谷、松本がFIXロープを設置し対応した。31日はフリコットへ向かう。距離が20km程と歩行距離は最も長い日であったが、特に難しい箇所は無いので問題なくトレッキングを終えた。街はネパールの祭りであるティハールが行われており、子供達が踊っていた。

11月1日～3日 ジープ、バス移動

1日はフリコットからジュムラヘジープで移動する。出発は2時間半ほど遅れ、日没後の到着となった。2日はババイへ向かう。ティハール祭で道路を塞ぐように子供達が歌って踊っているので通過に少し時間を要した。予定ではさらに進むはずであったが、車両の故障の影響でババイに宿泊することになった。3日の20時頃カトマンズに無事到着した。

11月4日～12日 カトマンズ

装備の片付け、デブリーフィングを行い帰国の準備を行った。予定が早まりカトマンズの滞在日数が増えたため、8日からは隊を解散し自由行動とし、クライミングやポカラでのトレッキング等、各々ネパールでのアクティビティを楽しんだ。12日深夜の便にてネパールを離れた。

11月13日 帰国

無事帰国しそれぞれの帰路に着いた。

【メンバーの感想】

はじめての西ネパール

花谷泰広 役割:プロジェクトリーダー

これまで何度となくネパールヒマラヤに登りに来ているが、西ネパールエリアは今回が初めてだった。これまでの十数回は、アンナプルナエリア、マナスルエリア、クンブ地方、カンチェンジュンガエリアなど、比較的メジャーな場所での登山が多く、人里からもそれほど隔絶された場所ではなかった。西ネパールに関しては興味はあったものの、アプローチの長さなどもあって少し敬遠していたのかもしれない。

コロナ禍がようやく落ち着き、このプロジェクトが再び動き始めた2022年から、私自身の仕事のウエイトが一気に重くなってしまった。長期間日本を留守にして、ヒマラヤ登山に取り組める状況ではなくなってしまっていた。また自分が仕事に不慣れであることも加わって、十分なトレーニング山の時間を捻出することも難しくなっていた。2022年はカトマンズでの準備のみ手伝って約一週間、2023年は途中まで登山に同行する形で一ヶ月間と、少しずつ日本を離れる期間を延ばしながら関わってきた。しかし今回、メンバーからサンクチュアリピークに登りたいと知らされて、少しうろたえてしまった。地域研究を進めれば進めるほど、途中離脱はできないということを悟った。「最悪途中で帰ればいい」という甘えは儚く砕け、腹をくくって全期間参加できる態勢を整えなければならなくなった。しかし腹をくくってしまえばそれを実現させることに集中するだけである。各方面には迷惑をかけたことは間違いないが、おかげさまで何とか一ヶ月半という時間を、ネパールヒマラヤの未踏峰に登るためだけに捧げることができた。改めて関係各位に御礼を申し上げたい。

さて、登山を振り返って一言で感想を言うなら、「これまでで一番刺激的だった」ということである。これまではベースキャンプから一日か二日で人里に戻れる場所で登山をしていた。しかし今回は、最後の街からベースキャンプまで一週間という時間を要した。ここまで人の世界と隔絶された場所に行くのは初めてだった。キャラバンは難路で、これまでのようにゾッキョ(水牛)やカッチャル(ロバ)のような動物はほとんど使えず、ポーターさんたちの力に頼らざるを得なかった。キャラバンの道は険しく、もはや我々の運命はこのポーターさんたちが握っていると言わざるを得ない状況だった。彼らなしに進むこともできなければ戻ることもできない。まだベースキャンプにもたどり着いていないのに、登山後の「脱出」という意識も芽生えた。もし大雪が降ったら、、もしポーターさんたちが迎えに来てくれなかったら、、そんな不安をずっと抱えながらの登山だった。

ベースキャンプ設営後は非常に順調に登山が進み、首尾よく全員でサンクチュアリピークの頂上に立つことができたが、終わった気は全くしなかった。全員に、むしろここからが核心という意識があった。あの困難な道をまた引き返さなければならない。自分たちのことよりも、荷物を担いでくれているポーターさんたちのことのほうが心配である。万が一谷に転落して、大怪我をしたり命を落とすようなことだけはあってはならない。自分たちができることはただ無事を祈ることだけであったが、屈強なポーターさんたちのおかげで自分たちの登山を完結することができた。

今回参加したメンバーたちにとっても本当に刺激的な時間だったに違いない。おそらく今後どんな場所に行っても、今回を凌ぐような体験はなかなかできないと思う。年齢的には可能性しかない年代だ。ヒマラヤキャンプに参加することそのものが、大きな一歩だったと思う。しかしその一歩を踏み出した経験によって、次の一歩は確実に軽くなったはずだ。それだけの経験ができたからこそ、ぜひ4人には臆せず次の世界に羽ばたいてもらいたい。

サンクチュアリピークという未踏峰を登ることができた。とても嬉しい最高の気分であるが「未踏峰」という言葉には実感が無い。私にとっての未踏峰とは何なのだろう。

私は登山を始める前にはバイクで旅するのが好きだった。その原動力は「見たことのない景色を見たい」「新しい場所を駆け抜けたい」だった。バイクで走ると普段見る場所がいつもと違う冒険に感じる。登山を始めた時、山の中ではさらに世界が輝いて見えた。そこで得られる充実感や感動はこれまで得られない体験であった。最初は初めて行く場所とにかく行きたかった。山頂からは周りの山々が見え、見える稜線すべてを歩きたいと思った。来週はあっちの山、次は反対側に見えた稜線と言うように。そのうち山でもっと自由になりたいと思った。私はいよいよ住んでいた関西を飛び出し長野県松本市に引っ越した。そうしてロープを使った登攀をするようになり、クライミングやスキーなどさらに山で自由に行動できるために取り組んだ。そしてバイクの時と同じで「見たこともない景色」を求め、少しずつ海外の山に憧れを持つようになった。

「未踏峰」とはそんな私の渴望の先にあったのだと思う。ヒマラヤキャンプに入った一番の理由はとにかく「ヒマラヤ山脈」を見てみたいと言うのも大きかった。高所登山や氷河のある山の戦略・方法を知るためにもヒマラヤで山をやりたいかった。

そうして臨んだ今回の2024年の未踏峰遠征であったが、振り返ると私にとっては今回の旅そのものが刺激の連続だった。登ったのはサンクチュアリピークという山であるが、登山以外にも山に辿り着くまでのネパールでの旅路はすべてが面白すぎた。多くの現地の人との関わりや文化などあらゆる面で興味深かったし日々もっと知りたいと思った。このようなヒマラヤでの登山遠征を始まりから終わりまで体験できたことは本当に良かった。また日々想定外のことが起こったが、ネパール経験豊富な花谷さんは「よくあることだ」と何食わぬ顔だったのも印象深い。小心者の私はネパールで生き抜くのは必至であった。ヒマラヤでの登山とはこの過程すべてを通して成されるものなのだろう。

今回このような体験ができたことは多くの支援者の方々のおかげであり最大級の感謝を述べたいと思う。またプロジェクトを立ち上げてくださった花谷さんや先輩方、そして現地スタッフにも感謝したい。2024年隊結成から今まで苦楽を共にしたメンバーと同じ時間を共有できたことは宝物であった。

皆様本当にありがとうございました。

さて私にとっては今回のヒマラヤ遠征はここ2年間の大きな目標であった。これまで常に何か目標を立てて自分なりに前に進んできたが、今は心にぽっかり穴が開いたような気分だ。遠征中にダワさん(ガイド・サードー)に「ヒマラヤってどういう意味なんですか?」と聞くと「ネパール語で山という意味です」と答えた。(後で調べると「雪のある山」だそう)それを聞いて、じゃあ私はこれからも日本でもどこでも「山」を続けていればまたここに来られるだろうか。また「山(ヒマラヤ)」に来たいと思う。

畠山愛以 役割:会計・通信

私たちの今回のヒマラヤ遠征は、「大冒険」という言葉が適していると思う。国内でのトレーニング期間を含め濃厚で、学びのある1年半であった。

私が初めてヒマラヤ登山を認識したのは登山を始めた2018年、当時所属していた札幌中央勤労者山岳会の先輩から幾多となく話を聞いてからだ。宴会で、「愛以ちゃんは体力あるし、英語も話せるから、いずれ海外を目指したら」なんて言われても、当時は大先輩方の後をついていくのに必死で、未踏峰に挑戦しようとはつゆにも思わなかった。今回の遠征地である西ネパールのドルポエリアにも、遠征隊が出ていたり、西ネパールの第一人者である故大西保氏と供に交友があることを、峰が決まってから知り、繋がりを感じて嬉しく感じた。

ヒマラヤキャンプの存在は、2023年隊メンバーのサキ(寺田)から知った。2022年にヨセミテで偶然彼女に出会い、その流れでラオスでクライミング遠征に行った際にプロジェクトの話を詳しく聞き、自分の力を試したい、同じ女性として自分も海外登山に挑戦したいと思った。勢いで応募をして、メンバーに入れていただいた。

国内での、未踏峰の選定、登頂を目標としたトレーニングは、充実して楽しかった。サンクチュアリーピークは、ヨオ(長谷川)とまつつん(松本)の作成してくれた未踏峰リストの中の私の担当にあり、私は「名前が素敵、のっぺりした感じが地形図的に北海道の山を連想させる感じで好き」と間抜けな理由で1番に選んだが、他のメンバーも各々の理由でサンクチュアリーピークを1番とし、この峰に決めた。

トレーニングは私が最も苦手とすることだが、メンバーからアドバイスを受けて、行動中の心拍数を気にしたり、富士山を1日2往復してみたり、血液循環を良くするために現在でも続けている禁酒をしたり、全てが新鮮だった。このトレーニング期間がなければ、私は他のメンバーと同じ様には行動できなかったと思う。高所順応のためにインドはラダックKang Yatse2に登ったり、ほとんど毎週トレーニングに付き合ってくれたユーダイ(平塚)にも感謝している。

ネパールへの渡航はメンバー全員初めてであった。空港から出た途端、クラクションの嵐に包まれた。排気ガスに目をしかめ、メンバー全員カトマンズの喧騒に茫然とした。海外登山の鬼門になるのが、その土地の環境に如何に順応するかであると言われている。準備を終えて、いざ出発と構えても、中々予定通りに進まない「ネパールタイム」に焦りを感じながらも、現地の人々が息をするかの様に繰り返す、「Bistari Bistari(ゆっくり ゆっくり)」を私も繰り返すことにした。朝一出発が午後出発になっても、当初の予定とは違うトレイルを進むことになっても、この呪文を唱えて心を落ち着かせた。

西ネパールは、まさに辺境の地で、チベット仏教とヒンドゥー教が混在する文化的にも興味深い土地であった。キャラバンを供にした、ポーター達でも、仏教とヒンドゥー教の派閥が分かれていたのも面白い。私たちのキャラバンの日程も、ヒンドゥー教の祭り「ティハール」によって変更になったが、現代に置いても、宗教や慣習を大切にしている彼らに敬意を払いたい。

キャラバンは冒険的であった。映画「キャラバン」(1999年制作)に登場するような牧歌的な風景が広がっていた。ポーターが案内してくれた道はずっと川沿いの道で、私たちの登頂は結果的に大迂行になった。息を呑む景色が広がっていたのだが、沢登り4級程度の巻きもあり、誰一人抜けることなくキャラバンを終えることができてよかった。

高所登山は、体調管理が核心とも言われているが、私はキャラバン開始から終わりまで咳が止まらなくなり、失敗してしまった。もう少し慎重になれば、防げた可能性があるのですが、このことを深く内省している。

個人の技術的な反省点としては、基本的なロープワーク、雪稜登攀技術が足りなかったことがあげられる。サミットプッシュ時に先頭を歩くチャンスを与えていただいたのに、実力不足で花谷さんに前を歩いてもらったことを、とても悔しく感じている。

サンクチュアリーピークはその名が示す様に、神秘的で、美しかった。登頂のために共に努力を重ねてきたメンバー全員で登頂できたことを、とても誇りに思う。登頂できて、とても嬉しかった。

最後に、今回当プロジェクトを支援してくださった日本山岳会、企業様、個人支援者様に深く感謝申し上げます。プロジェクトを立ち上げてくださった花谷さん、また多方面の支援のおかげで、我々は精一杯挑戦することができた。2024年隊メンバーで今は北海道の山に眠るリョーマ(浅木)、彼の山への想いも私たちの力になった。リョーマと一緒に登れて良かった、有難う。

長谷川 陽央 役割: 装備・医療・保険

とても楽しい旅でした。

ご支援いただいた皆様へ

本遠征に寄付していただいた日本山岳会会員の皆様、装備や資金をご提供いただいたメーカーの皆様、今回のような大規模な遠征ができたのは皆様のお陰です。誠にありがとうございました。

仲間へ

本遠征の目標であったSanctuary peakは、アプローチに不確定要素が多く、自分だけだったらこの山は選ばなかったかも知れません。

しかし、そのような不確定要素が多い目標であったからこそその楽しみを味わえました。

約50kmのキャラバン中、小屋や村はなく、道は辛うじて踏み跡があるだけ。他の隊は皆無。そして未踏峰への登頂。こんな遠征は他ではできないと思います。

この山を選んでくれてありがとうございます。

また、皆さんからは山登りの技術のみならず、自分にはない考え方もたくさん学べました。一緒にたくさん山に入り、話し合ってくれてありがとうございました。

家族へ

私は会社員で妻子持ち、子供は生まれたてと、今回のような大規模な遠征の隊員にしては珍しいほど普通の人間だと思います。そんな自分が参加できたのは、家族の協力があってこそです。妻、子、お義父さん、お義母さん、義妹、母には、遠征中のみならず日々大変お世話になっておりました。ありがとうございました。

自分へ

私は登山家というより、山の旅人だと思う。

山の景色が好きで、中でも雪や氷が好きで、行きたいところに行きたい、見ているだけでなく全力で体感したい、あの先はどうなっているんだろうと感じたら実際に見てみたい、地図を眺めていて何があるんだろうと感じたら実際に見てみたい、まだ誰も見たことのない景色を見てみたい。

自分が好きな景色を全力で味わう行為として、登山やクライミングが好きだ。

これからも自分の心の向く目標に向かって、全力で頑張っていきたい。

家族、仕事、山の3つに研ぎ澄ませて、全てを真剣に、楽しく取り組んでいきたい。

バックパッカーで南米に行った際に、パタゴニアで見た山々があまりにもカッコ良く、それから頻繁に登山をするようになった。そのような経緯もあり、自分の中では常に海外の山への憧れがあった。ただ、私は山岳会などに所属していたわけでもなく、海外の山へどのようなプロセスを踏めば良いのかも分からないまま、漠然と登山をしたり、ジムでクライミングをしたりしていた。2023年の春に偶然にもSNSでヒマラヤキャンプの募集を見つけ、参加することができた。

そこから2024隊でヒマラヤに行くことを決断し、怒涛の日々が始まった。隊に入ることが決まった次の日、職場に春で仕事を辞める旨を伝えた。冬山で初めて人とテント泊をし、テント泊のいろはを教わった。危なっかしい雪上歩行の正しい方法を教わった。今まで数回しかやってこなかったアルパインクライミングをアイさんを始めとしたメンバーに連れていってもらいトレーニングをした。他にもここには書ききることができないくらい多くのことを今回の隊のメンバーから教わった。正直なところ、本当に2024年の秋までに最低でもみんなについていける程度の技量を身につけることができるのか不安だったが、3人の「雄大と行きたいから、一緒に頑張ろうよ!」という言葉で、遠征まで頑張ることができた。

遠征前に最後の予行練習として、インドヒマラヤへ登山に行った。これまでにトレーニングしたことを本番に近い標高や難易度の場所で実践するつもりであったが、キャラバン前日に38度の発熱をし、そこから体調が良くなることはなく、5000mのベースキャンプまでは登ることができたが、サミットプッシュに挑戦することすらできなかった。この結果は大いに私の自信を喪失させた。ただこの経験から学んだこともあった。うまく言葉にすることができないのがもどかしいが、結局自分の実力以上のことはできないし、コントロールできないことの方が多い、張り切りすぎてもまた体調を崩すだけだ、考えたって仕方がないとある意味リラックスした状態でネパール遠征には臨むことができた。

ネパール遠征はというと、一言で言うならば本当に楽しかった。到着直後は記録的な豪雨がカトマンズで降り出発すら危ぶまれたが、カトマンズを出れてからは毎日変わる景色や様々な文化に心を奪われた。キャラバン中に見た景色やキャンプ地は、人生で1番綺麗な景色はどこかと聞かれたら、ここが1番綺麗だ、と言えるくらい綺麗な景色の連続だった。雇ったポーターたちに限らず、辺境の村に住む人たちはとてつもなく健脚で皆自分より歩くのが速く、自分なんてまだまだだなと感じさせられることばかりだった。

サミットプッシュでは6000mまではそれなりに動くことができたが、それ以降は頭も働かず、身体も動かず、FIXされたロープを惰性で登り続けた。頂上の記憶も曖昧で、呆気なく登山が終わってしまった。登山が終わって数日間は、ベースキャンプでひたすら怠惰に過ごしていたが、時間が経てば経つほど、貴重な経験ができたなと身に沁みて感じている。今回の遠征を糧にこれから色々な海外の山に挑戦していきたいと思う。

最後に、アイさん、まっつん、よおさん、1年間ありがとうございました。3人がいなければ自分が未踏峰を登頂することなんてできなかったと思います。。今回登れたことよりも、3人と出会って一緒にトレーニングをしたことが自分にとって1番価値のあることだったと思います。これからも遊んでください。花谷さん、ヒマラヤキャンプに入って1人で山に登っていた頃と比べ、自分の生活は驚くほど変わりました。ヒマラヤキャンプの仲間と登る今が最高に楽しいです。ありがとうございました。そして、サポートしてくださったスポンサーの皆様、応援してくださった皆様、皆様のおかげで無事に遠征を終えることができました。心より感謝申し上げます。

さて、次はどこに行こうかな。